

実験 2

概要と予測

実験 2 は、実験 1 の手続きを改善した上での追試である。手続き上の主要な修正点は、まず、低地位者（解答者）の予想外の好成績を、実験 1 ほど極端に良いものとはせず、ある程度曖昧さが残る程度としたことである。第 2 に、解答者はすべて実験協力者になってもらい、少数の人に繰り返し協力してもらったことである。他の細かい点については、方法の中でふれた。

実験 2 も実験 1 と同様に、高地位者に「行動統制」「運命統制」がそれぞれ有る場合と無い場合を独立に操作して、評価の対象となる低地位者が示した課題遂行成績から課題に関する能力をどう認知するかを測定した。実験参加者も実験 1 と同じ大学の学生であり、自分たちは一般に数学の能力が低いと認知していた。低地位者の役割に就いた実験協力者には、参加者と同じ大学生であるように演じてもらい、しかも数学課題で好成績を得てもらった。このように実験 2 でも、2（行動統制の有り・無し）× 2（運命統制の有り・無し）の要因配置計画の実験デザインであった。

実験 2 の予測も実験 1 と同様で、行動統制のある場合には無い場合よりも、対象人物をステレオタイプ化しやすく、数学能力を相対的に低く認知しやすいだろうというものであった（仮説 1）。他方、運命統制のある場合にも無い場合よりも、対象人物を同様にステレオタイプ化しやすく、数学能力を相対的に低く認知しやすいだろう（仮説 2）。

方法

参加者

K 大学の女子学生 24 名が実験に参加し、4 つの実験群にランダムに割り当てられた。実験終了後、参加者には千円の謝礼が渡された。

実験協力者としては 5 名の一橋大学の女子学生が参加した。このうち 3 名が、それぞれ 10 回、7 回、5 回のセッションを担当し、他の 2 名は 1 回ずつを担当した^(注 1)。

手続き

概要

参加者は実験協力者とともに実験室に案内されて、「課題遂行と印象形成に関する研究」と題された実験についての全体説明を受けた。課題は、一方に出題者の役割、他方に解答者の役割になってもらい、数学のパズルを解いてもらうことであると紹介された。この課題の後に、

相手の印象がどうなるのか調べたいと告げられた。

次に実験手続きの概要について、6つの段階をふむことが伝えられた。それは、1. 全体説明、2. 事前の質問紙調査、3. 役割の決定と説明、4. 出題と解答を繰り返す、5. 事後の質問紙調査、6. 実験後の説明、であった。

その後、上述の段階に沿って実験は行われ、3の段階の説明用紙の中で、実験条件である行動統制および運命統制の有無が操作された。そして課題遂行の後に、5で主たる従属変数が測定された。

実験時間は、全体で30分間程度であった。

実験開始前

実験参加者と参加者を装った実験協力者は、指定された時間に一橋大学東キャンパスの門の前で実験者と待ち合わせた。両者はすぐ近くの建物にあった実験室に案内された^(注2)。

実験者は本研究の代表者が12回、1名の男子学生が残りの12回を担当した。実験者は「実験者マニュアル」に従って実験を遂行した。この内容は付録2-1に示した。実験者の要因を組み入れた分析を実施しても、主たる従属変数の結果には何ら影響を及ぼしていなかった。

全体説明と事前の質問紙調査

実験室に案内された後に実験参加者は、向かい合って机の縦長方向の端に着席した。実験室の配置等は実験1と同じであった(図1-1参照)。この時、実験参加者には入り口から奥の実験者の左手側に、実験協力者には手前の実験者の右手側に着席するように実験者が誘導した。

最初に参加者は、概要で述べた実験の全体説明を受けた。この内容は口頭で伝えられるとともに、机の上に置かれたクリア・ケースに入った用紙に書かれてあった。課題遂行には何通りかの方法があって、その1つの方法で実験を受けてもらうことも告げられた。なお、説明の後に質問の機会を与えたが、特に質問は出なかった。

次に実験参加者は事前質問紙を受け取り、回答した。調査用紙は順に、1. 相手参加者との関係、2. 相手参加者の印象(8項目の形容詞についての各7段階尺度)、3. 所属する大学の学生一般のイメージ(10項目の形容詞についての各7段階尺度)、4. 自己認知尺度(3と同じ内容)、5. 性別、6. 年齢、7. 学籍番号に関する質問から構成されていた(付録1-1参照)。

形容詞尺度はいずれも単極の形式であり、具体的項目は順に、「外向的な」「勤勉な」「神経質な」「親切的な」「頭がよい」「協調性のある」「事務処理能力がある」「数学的能力が高い」「言語的能力が高い」「指導力のある」であった。上記3、4ではこれらすべてを、上記2ではこのうち第8項目までを用いた。

実験協力者も同じ調査用紙を受け取り、上述の1、2の質問については毎回きちんと回答した。3以降の質問に関しては、回答しているように装ってもらった。

役割の決定と説明

「出題者」あるいは「解答者」の役割については、くじ引きによる方法で事前に実験者の方で決定していると教示した。そして、実験参加者には出題者、実験協力者には解答者の役割に就いてもらうよう要請した。この教示に異議や疑問を表明した者はいなかった。

そして、役割についてまず口頭で説明した。具体的には、「出題者の役割は、全部で5問を順番に出題してもらいます。解答者の役割は、その問題に、1つ1分20秒で解答していただきます。」「出題者はこの『出題兼解答用紙』に問題番号を書いて、解答者に渡してもらいます。解答者は解答欄に答えの番号を書いて、出題者に返してもらいます。選択式ですので、時間が足りなかった場合には勘で答えても構いません」「なお、解答が正解だったかどうかは、出題者には1問ずつ確認していただきますが、解答者には課題の途中にはお知らせしません。」と告げた。

次に、「全体説明」の入ったケースの裏側に用意してあった、それぞれの役割についての説明文書を読んでもらった。参加者はここから説明はすべて文書で行うと告げられて、声を出さずに内容を黙読した。質問がある場合には、質問用紙に書いて実験者に渡してもらうようにも要請された。

出題者に配布されていた説明文書（「出題者の仕事」；付録6～9を参照）には、共通部分として次の説明が書かれていた。まず、「問題用紙」にある15問の中から5問を選んでもらうこと。その15問は「空間把握」「判断推理」「数的推理」の3つの領域からの問題であること。正解の選択肢には赤で○をつけてあることであった。

実験協力者である解答者には、事前に手続きについての説明がなされていたが、ここでも説明文書（「解答者の仕事」；付録10参照）を読んでもらい、次の点を確認した。まず、各回の具体的手続きと回数（5問）。問題用紙に正解が書かれていること。時間中はまじめに解いているように装うこと。最初の2問と第4問には必ず正解し、第3問と最後の第5問には、わざと間違えた答えを返すこと、つまり、正答を○、誤答を×としたときに、「○○×○×」の順に答えてもことである。これに応じて解答者は、実験者が指定した遂行成績を挙げるように行動した。

独立変数の操作

行動統制の操作 行動統制が有る条件の出題者は上記の役割説明の後半部分で、問題選択に関して以下のように自由に5題を選択するように要請がなされた。この中では併せて各回の具体的手続きも記述した。

あなたは毎回、15問のうちから1問を選んで、その番号（例えば「A1」）を「出題用紙兼解答用紙」に記入して、解答者に渡してもらいます。制限時間がきたら、解答が記入された用紙が解答者から戻りますので、○×で採点してください。2回目からは、前の問題の解答結果を見てから、次の問題を選んで結構です。これを5回繰り返しますが、

5問すべて違う問題を選んでください。

他方、行動統制が無い条件では問題選択に関して、以下のように決められた問題を出題するように要請がなされた。この条件では、直前に行われ、運命統制条件が一致する、行動選択有り条件での問題選択結果を与え、全く同じように選択させた。

あなたは毎回、決められた問題の番号を「出題用紙兼解答用紙」に記入して、解答者に渡してください。制限時間がきたら、解答が記入された用紙が解答者から戻りますので、○×で採点してください。

運命統制の操作 そのすぐ下の部分で、運命統制有り条件では、「【ここから重要です。驚かずに静かに読んでください】」と強調された後に、以下のような記述で解答者の謝礼の額を出題者が決められることを告げた。

あなたへの謝礼は交通費を含めて1000円ですが、解答者の謝礼はあなたの評価によって決まります。課題遂行の様子をみて、500円から1500円の範囲であなたが決めてください。ただし、成績だけで判断するのではなく、解答にまじめに取り組んでいたかどうか、といったことも判断材料としてください。なお、あなたの謝礼の額や、あなたが謝礼を決めたことについては、解答者には一切教えません。

この条件の出題者のテーブル上の片隅には、この説明文書を読んでいる途中で実験者が、相当額が入り、上に「謝礼用」とラベルが付いた名刺カード・ケースを置くようにした。

他方で、運命統制無し条件では、謝礼額の決定についてはふれず、以下の点だけが記述されていた。

また、課題遂行の途中、解答者がまじめに取り組んでいたかどうかなどについて後で判断をうかがいます。

出題者が説明内容を読み終わり、質問を書き出す様子を示さないことを確認する時間的余裕をとってから、次の課題遂行に入った。

課題とその遂行

実験者は課題遂行に入ることを告げて、問題用紙を渡した。出題者には、正解の選択肢に赤丸が記入されているものを渡して、どれを出題するのか考えるように教示した（付録2参照）。解答者には正解がないものを渡すように見せかけて、正解には鉛筆で丸がついている用紙を渡した（付録3参照）。

これらの問題は、大学生の就職試験対策用の問題集の数理的領域に関する問題の中から、適宜選択して作成した。大別すると「空間把握」「判断推理」「数的推理」の3領域があったが、厳密な区分ではなく、いずれも広い意味での数学能力を判断可能なものであった。いずれの問題も5つの選択肢の中から、1つの正解を選ぶ形式であった。

続いて、実験者は出題・解答両者にわかるように出題用紙兼解答用紙（図1-2参照）を示しながら、出題者には問題の番号を毎回その用紙に記入してもらい、ついでの上から解答者に渡してもらうように要請した。なお、5枚1組の出題用紙兼解答用紙はあらかじめ出題者のテーブルの上に用意しており、この時点でそれを表にもらった。続いて、解答時間は1問1分20秒で、20秒前には予告し、時間がきて合図があったら、すぐに止めるように解答者に要請した。もしも正解がわからなくても、選択式の問題なので、いずれかの選択肢にその時点で丸をつけ、やはりついでの上から出題者に返すように教示した。出題者には問題用紙の正解に基づいてそれを採点するように要請した。

そして実験者が合図して、第1問を開始した。上述の手続きに基づいて、出題、解答、採点を行い、これを5問に関して繰り返した。

事後の質問紙調査（従属変数の測定）

第5問を出題者が採点し終えたところで実験者は課題遂行の終了を告げた。引き続き事後調査に回答していただきたいと、事後の質問紙を両者に渡した。出題者には4つの条件に応じた質問紙のいずれかを渡し（付録12、13参照）、解答者には解答者用の質問紙を渡した（付録16参照）。

出題者用の質問紙の最初には、解答者の遂行結果を記入する質問がおかれ、5問に関する正解（○）・不正解（×）を出題用紙兼解答用紙を参照しながら記入するよう求められた。

運命統制有り条件の出題者の次の質問は、解答者の謝礼額の決定に関するものであった。謝礼額は名刺カードの中にある硬貨（500円玉が2枚、100円玉が5枚）を手にとって、その下に置かれていた小さな袋（「おとしだま袋」）の中に任意の金額を入れることによって決定する方式であった。実験者はこの時点で名刺カードのふたをあけて、質問の要請通りの方式で謝礼額を決めるように無言で促した。運命統制無し条件の出題者には、この質問も手続きもなかった。

出題者の次の質問では、解答者の現在の印象がたずねられた。これは事前質問紙の2と同一の8項目であった。この質問の数学能力に関する項目への評定が、主たる従属変数である。続く質問でも、解答者の印象について別の形式でたずねた。ここでは「数学パズルが得意だと思う」など、実験1と（異なる順序だったが）同じ8項目に関して、賛成から反対までの7段階で評定を求めた。その次に、解答者から見られている自分（出題者）の印象について、10項目に関して評定を求めた。この質問は事前調査の3（および4）で用いたものと同一であった。

行動統制有り条件の出題者には次の質問で、解答者に与えた問題を選択したときの基準が何だったのか、自由記述形式で回答を求めた。無し条件の出題者にはこの質問の無い用紙を渡し

た。

その後の出題者用の質問はすべて共通で、出題された問題が解答者にとって難しかったかどうか、その問題が解答者の数学能力を評価する上で適切だったかどうかを、それぞれ7段階で評定させた。また、解答者の遂行結果の大まかな評価を、「良かった」「どちらとも言えない」「悪かった」の3段階で回答させた。さらに、解答者の成績の原因帰属を、「頭の良さ」「努力」「問題の難易度」「自分が適切な問題を出したこと」「運」の5項目についてたずね、各要因とも貢献したかどうかを7段階で回答させた。そして、実験についての感想を自由記述形式で書くように要請した。

なお、解答者の質問紙は、出題者の印象についての2通りの質問、出題された問題の難易度と適切さの評価、出題者から見られている自分（解答者）の印象、成績の大まかな評価、感想に関する質問が、この順で並んだものであった（付録14参照）。解答者には回答可能な部分だけ回答し、後は回答しているように装うようにあらかじめ要請した。

実験の終了と実験後の説明（ディブリーフィング）

両者とも記入し終わったところで、実験者は質問紙を回収した。そして、実験に対する感想や、疑念がないかどうかを調べた。この後に、実験についての詳しい説明（ディブリーフィング）を実験1と同様に実施した。具体的には付録15に示した用紙に基づいて行った。

結果

事前調査の結果

相手参加者（解答者）との関係について、実験参加者は全員「まったく知らない」と回答した。

解答者の初対面の印象について、実験参加者は概して好意的方向に回答した。「外向的な」「神経質な」を除くすべての項目で、平均値は中立点である4から好意的方向に有意に隔たっていた ($t_{s(23)} > 3.11$ $p < .05$)。「数学的能力が高い」の項目に関しても好意的方向の回答が得られ ($M=4.96$)、中立点からの差も有意であった ($t(23)=5.47$ $p < .001$)。

K大学の学生の一般的イメージについてたずねた質問への回答では、はっきりした特徴が認められた。もっとも極端に好意的方向に回答された項目は「外向的な」であった ($M=5.21$; $t(23)=6.70$ $p < .001$)。同様に中立点から好意的方向に有意差が認められた項目は、「親切的な」 ($M=4.63$; $t(23)=3.71$ $p < .005$)、「指導力のある」 ($M=4.54$; $t(23)=2.72$ $p < .05$) であった。以上の結果は実験1とまったく同じである。

他方、もっとも極端に否定的方向に回答された項目が「数学的能力が高い」であって、平均値は2.78で、中立点から1ポイント以上隔たっていた ($t(22)=6.87$ $p < .001$)。このように、数学能力が低いというK大学生に関するステレオタイプが、K大学の学生には共有されていた

ことが、実験 1 に続いて確認された。

K 大学生一般を否定的方向に認知する傾向は、他にも 3 つの類似した項目で認められた。それは、「勤勉な」 ($M=3.63$; $t(23)=3.58$ $p<.05$)、「頭がよい」 ($M=3.42$; $t(23)=3.44$ $p<.005$)、「事務処理能力がある」 ($M=3.50$; $t(23)=3.14$ $p<.01$) であった。

参加者の自己認知への回答は、K 大学生の一般的イメージほど極端ではなかった。好意的内容では「親切」 ($M=4.67$) で、中立点からの有意差が認められた ($t(23)=2.39$ $p<.05$)。否定的な特徴では、頭がよくなり ($M=3.38$; $t(23)=3.72$ $p<.005$)、数学的能力が低い ($M=3.08$; $t(23)=4.61$ $p<.001$) と自己認知する傾向があった。他の項目の評定値は中立点から有意差が認められなかった。

手続の確認についての事後調査の結果

実験 2 でも独立変数の操作は明確であると考え、とくに操作チェックの項目は設けなかった。他方で、解答者の成績をどう評価したのか、については確認の項目を設けた。まず、5 問の課題遂行成績の結果を記入する欄には、参加者全員が「〇〇×〇×」の結果を正しく記入した。また、3 段階でその成績を評価させた質問には、24 人中 20 人が「成績は良かった」と回答し、残り 4 人が「良かったとも悪かったとも言えない」と回答した。この回答結果は実験条件と特に関連を持たなかった。

運命統制の条件の参加者は、平均 1208 円の謝礼を解答者に与えようとした。この金額には行動統制の有無の条件間で有意差は認められなかった ($M=1200$ 円 vs 1217 円)。

行動統制の有った条件の参加者には、事後調査で問題選択の基準についてたずねた。回答内容はさまざまであったが、いずれにしろ全員から回答が得られた。

数学能力の認知

事後調査における数学的能力の認知は、好意的なものであったが ($M=5.33$)、実験 1 ほど極端ではなかった。この回答の条件別の平均値を示したものが図 2-1 である。これを、行動統制 (2) × 運命統制 (2) の要因で分散分析してみると、行動統制の有無の主効果が有意だった ($F(1, 20)=5.29$ $p<.05$)。仮説通り、行動統制が有った場合には無かった場合よりも ($M=5.08$ vs 5.58)、解答者を能力が低いとステレオタイプに沿った方向で認知したのである。他方、運命統制の要因および両者の交互作用は認められなかった。このように、仮説 1 が支持されたが、仮説 2 は支持されなかった。

実験 2 でも課題遂行後の数学能力の認知は、初対面の時の評定値と相関を持たなかった ($r=.03$ ns)。また、事後の平均値の方がより高い傾向にあったが、その変化は有意水準には達しなかった ($t(23)=1.81$ $p<.09$)。

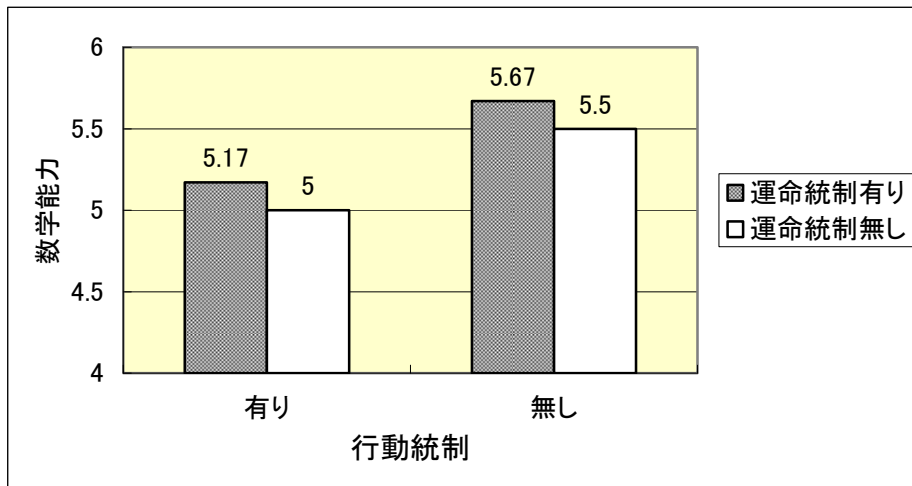


図 2 - 1 数学能力の認知 (条件別の平均値)

他の特徴の認知

数学能力の認知は、「頭がよい」($r = .68$ $p < .001$)、「事務処理能力がある」($r = .65$ $p < .005$)の評定と正の有意な相関を持ち、他の項目とは関連しなかった。この頭のよさの評定について条件別の平均値を示すと図 2 - 2 のようになった。これを分散分析すると、行動統制の有無の主効果に一定の傾向がみられた ($F(1, 20) = 3.00$ $p < .10$)。行動統制が有った場合の方が無かった場合よりも ($M = 5.33$ vs 5.83)、解答者の頭のよさを低く認知していて、これも仮説 1 を支持する方向の結果である。他方、運命統制の要因および両者の交互作用は認められなかった。

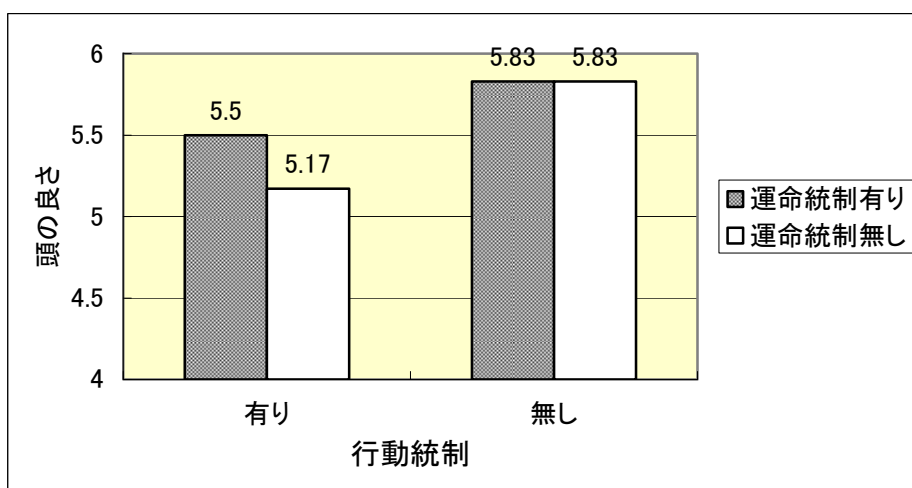


図 2 - 2 頭の良さの認知 (条件別の平均値)

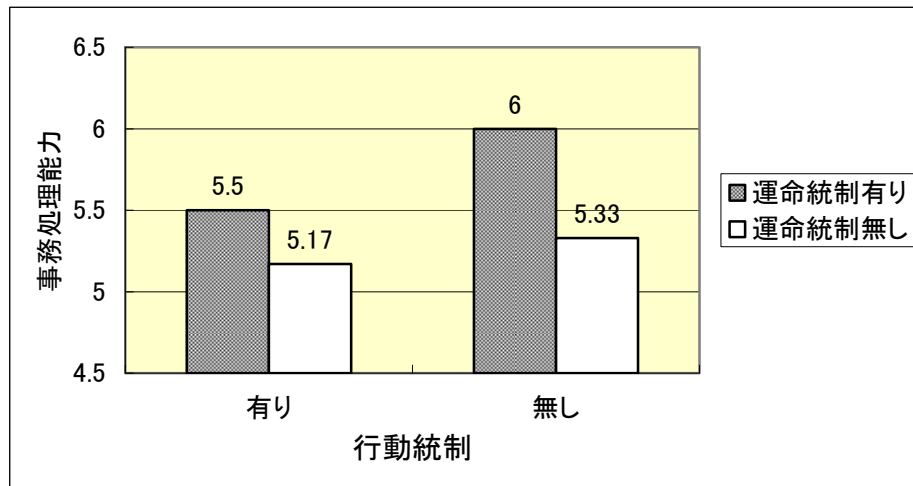


図 2-3 事務処理能力の認知（条件別の平均値）

もう1つの事務処理能力についての評定には、図2-3に条件別の平均値を示したように、異なる傾向が認められた。分散分析の結果、行動統制の要因の主効果は有意水準には達せず ($F(1, 20)=2.35$ $p<.15$)、代わりに運命統制の有無の有意な主効果だけが認められた ($F(1, 20)=5.29$ $p<.05$)。この主効果は、運命統制が有った場合の方が無かった場合よりも解答者の事務処理能力を高く認知したことを示していて ($M=5.75$ vs 5.25)、仮説とは逆方向の結果である。

その他の特徴についても分散分析を実施すると、「親切な」「協調性のある」の2つの項目で、運命統制の要因の主効果が認められた（順に； $F(1, 20)=3.52$ $p<.08$ ； $F(1, 20)=4.90$ $p<.05$ ）。しかし、この2つの評定値はともに、対応する事前の評定値と正の有意な相関が認められた ($r_s>.68$ $p_s<.001$)。そこで事前の評定値を共変量にして共分散分析を実施すると、どちらの場合も主効果は有意水準に達しなくなった（順に； $F(1, 19)=2.93$ $p<.11$ ； $F(1, 19)=2.96$ $p<.17$ ）。したがって、これらの結果は操作された要因に基づかなかった可能性があると考えられる。

別の形で印象をたずねた質問では、分散分析の結果で主効果または交互作用が得られた項目は、「数学パズルは得意だと思う」かどうかの項目を含めて、一つもなかった。

相手から見た自己の認知

解答者から見た自己に関する質問への回答では、まず、数学能力の項目について特徴的な結果が得られた。この推測（反動的自己認知）の条件別の平均値は図2-4の通りで、運命統制が有った条件で無かった条件よりも ($M=2.83$ vs 3.58)、数学能力が低いと見られていると認知する傾向があった。実験デザインにそって分散分析を実施してみると、運命統制の主効果のみが認められた ($F(1, 20)=10.95$ $p<.01$)。この結果は、事前の数学能力の自己認知を共変量に用いた共分散分析を実施しても基本的に変わらなかった。

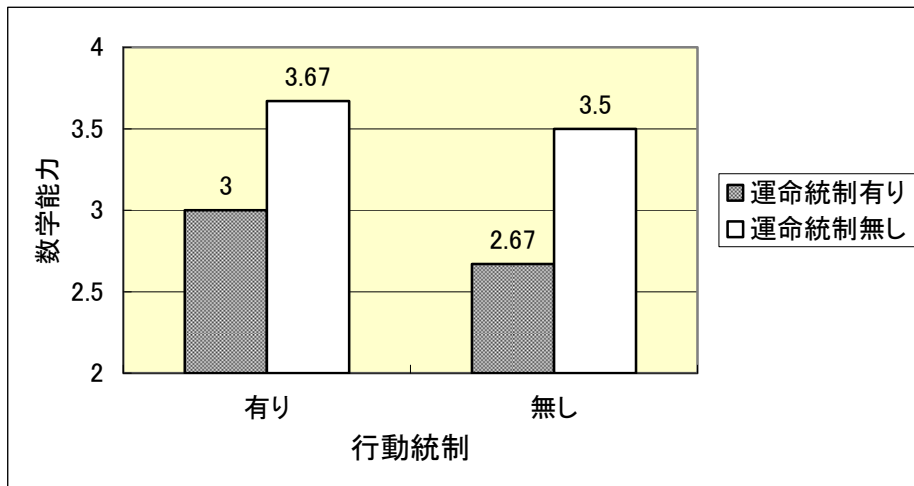


図 2-4 数学能力の反映的自己認知（条件別の平均値）

また、解答者から見た自己の親切さについての認知に関しては、図 2-5 で平均値を示したような結果が得られた。分散分析を実施してみると、ここでは行動統制の主効果が有意であった ($F(1, 20)=5.55$ $p<.05$)。これは、行動統制が有った場合には無かった場合よりも ($M=3.58$ vs 4.33)、自分が親切でないと見られていると推測していたことを示す結果である。この結果も、事前の親切さの自己評定を共変量に用いた共分散分析を実施しても基本的に変わらなかった。

遂行成績の原因帰属

解答者の成績が何によって決まったと思うか、5つの要因をあげてそれぞれの程度を評定さ

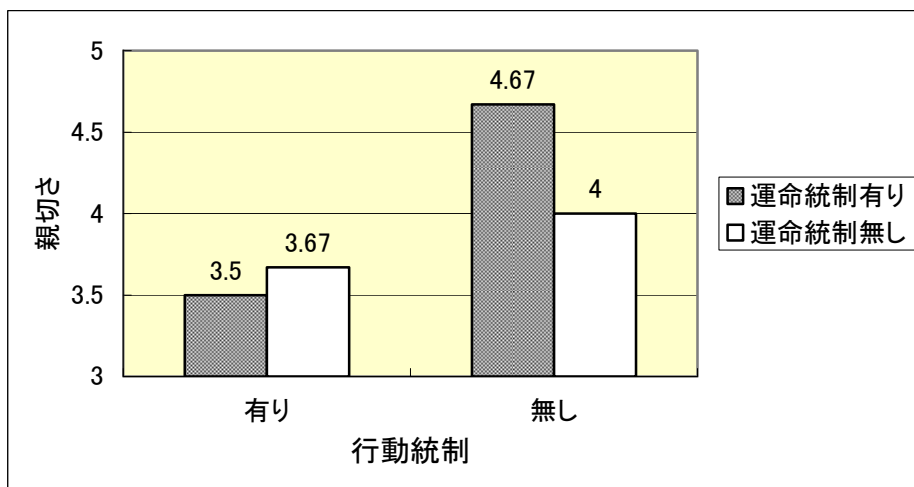


図 2-5 親切さの反映的自己認知（条件別の平均値）

せた。その結果、もっとも貢献したとされた要因は「解答者の頭の良さ」(M=5.67)であった。この要因について2×2の分散分析を実施すると、行動統制の有無の主効果に一定の傾向が認められた($F(1, 20)=4.29$ $p<.06$)。これは、行動統制があった場合の方が無かった場合よりも(M=5.42 vs 5.92)、解答者の頭の良さが成績の決定に貢献していなかったと判断する傾向を示している。この要因への原因帰属と事後の頭の良さ($r=-.03$ ns)、数学能力($r=.08$ ns)の評定との間には相関は認められなかった。次に貢献していたとされた「解答者が努力したこと」(M=5.38)については、2×2の分散分析を実施しても、主効果、交互作用とも認められなかった。

3番目に貢献されているとされた「問題の難易度」について分散分析を実施すると、運命統制の有無の主効果が有意だった($F(1, 20)=6.10$ $p<.05$)。運命統制があった場合の方が無かった場合よりも(M=4.33 vs 5.33)、問題の難易度が成績の決定に貢献している程度を低く評価したことになる。

もっとも貢献度が低いとみなされた要因は「自分が適切な問題を出したこと」であった(M=3.54)。この要因について2×2の分散分析を実施しても、有意な主効果、交互作用は認められなかった。他方、貢献度が低い方から2番目の要因は「運」で(M=3.75)、分散分析を実施してみると、行動統制の有無の主効果にのみ、一定の傾向が認められた($F(1, 20)=3.95$ $p<.07$)。これは、行動統制が有った場合の方が無かった場合よりも(M=3.17 vs 4.33)、運が貢献していないと判断しやすかったというものである。

考察

行動統制の影響

実験2では行動統制の影響が、仮説1の通り認められた。行動統制のある出題者の方が、無い出題者よりも、成績のよかった解答者の数学能力を低く認知する傾向が認められたのである。この傾向は、行動統制のあった者の対人認知には、数学能力の低さに関わるステレオタイプが影響した可能性を示唆している。「頭の良さ」の認知についても同様の傾向が認められた。

この結果は主として、行動統制に伴って相手への注意が減少したことによると推測できる。行動統制有りの者はどの問題を出したらよいのか、課題遂行場面で考え続ける必要があった。この点で忙しく、統制力のない者と比べて解答者に払う認知資源は少なかったと考えられる。もちろんこの実験状況では、解答者の成績そのものは、正解・不正解の形でフィードバックされ、明快だったと思われる。しかし、途中で解答者がどのように課題に従事しているか注意を払ったり、正解・不正解をどのような解釈してよいのか考えたりする時間的余裕は相対的に乏しかっただろう。その結果、予想外の好成績という個別情報だけでなく、従来から持ち、この状況でも思いつきやすかった対象者に関するカテゴリ情報(ステレオタイプ)を用いる側面が生じやすかったと考えられる。

他方、この実験状況で行動統制力を持ったことは、統制の対象人物の価値を減じたり、その地位関係を維持しよう、といった動機づけの過程とは関係がないだろう。実験参加者にとって、解答者に対して「数学ができない」というステレオタイプは当てはめる動機づけは、特に見あたらないと思われる。

残念ながらこの実験では、注意が媒介する過程を実証する証拠を得ていない。可能であれば、出題者をビデオ撮影して、注意量を測定する予定であった。しかし、出題者に気づかれずに撮影可能な実験状況を設定することができなかった。この点は今後の研究課題としたい。

また、そもそもステレオタイプは活性化していたのか、という疑問を持つ人もいるだろう。この点に関して直接の証拠はない。しかし、事前にステレオタイプを確認する質問を受ける、よく知っている大学名の点以外は未知の対象人物を、その大学に特徴的なステレオタイプの点で評定する、といった手続は、当該のステレオタイプが利用可能な状況にあったことを強く示唆している。むしろ、それを利用しないように意識的過程が働く危険性を心配しなくてはならない実験状況だったかもしれない。

もちろん、ここでの行動統制の操作の妥当性に関しては、今後の研究を通じて検討していく必要があるだろう。特に、行動統制の要因以外を同時に操作している可能性はある。例えば、行動統制が有る条件の方が、評価懸念が高まっている、といったことである。この問題については、今後の批判的検討を待ちたい。

運命統制の影響

運命統制の影響は認められず、仮説2は支持されなかった。数学能力の認知と関連した事務処理能力の認知では、むしろ仮説と反対の影響が認められた。運命統制が有った場合の方がより事務処理能力が高いと、ステレオタイプとは逆方向の推測をしたのである。

この結果は、この実験での運命統制の操作にも、他の要因の操作が同時に伴ったことを疑わせる。解答者の謝礼の額を決定できるという事態は、実験参加者に強い緊張を強いていた可能性がある。この緊張感は、例えば正確に相手を評価するように対人認知の動機づけを高めたかもしれない。それゆえに、むしろ運命統制有り条件でより個別情報を重視した推測を行ったと解釈可能である。日常生活の中でも、運命統制力を持つ地位の高い人に対して、それ相応の責任感と仕事の成果を周囲が要求し、その要求に運命統制者が答えるよう行動することもあろう。これは勢力者やリーダーの理想的な姿ともいえる。

では、従来の研究では、勢力者の対人認知にこのような理想的な姿が反映されてこなかったのはなぜだろうか。一つの解釈は、運命統制力を持つことを当然とみなしていることが相手の個別情報への注意を減じ、ステレオタイプに沿った判断や、地位の低さに応じた判断を導いていた可能性である。この実験場面では、運命統制が与えられたことに対して多くの参加者はとまどいを感じていたのではないかと考えられる。当然のこととしてその力を受け入れてもらうためには、もう少し別の手続が必要だったかもしれない。

以上の考察は、ここでの運命統制の実験操作の妥当性の批判にもつながるが、他方で従来の

実験で操作されていた内容をいくつかに分けて考える必要性も提起する。運命統制を持つことと、運命統制を当然のこととみなすことの区別である。前者の要素のみを取り上げて考えてみれば、勢力のある人がむしろ注意を払いやすい条件も十分考えられるだろう。例えば自分の勢力に対する責任感が求められる状況である^(注3)。

ここまでの考察の当否を検討するためには、しかしながら、まだ多くの研究が必要となる。

実験2でも、反映的自己認知のいくつかの項目で興味深い結果が認められた。自分の数学能力の程度が解答者からどう認知されているかの指標の結果では、運命統制の主効果が認められた(図2-4参照)。運命統制が有った条件の方が、その認知が低いとみなしていたのである。この解釈は難しいが、運命統制力が参加者に上述のような緊張感やとまどいをもたらしていたとすれば、その何らかの反映という可能性はある。しかしそれがなぜ数学能力に関してなのかは不明である。

他方で、親切さの反映的自己認知では、行動統制の主効果が認められた。ここでも、統制が有った条件で、親切でないと自分が否定的に見られやすいと推測していた。この結果は、自分の出題行動が相手の意思や好みに反するものだと感じる程度が、行動統制有り条件で大きかったと考えれば解釈可能である。もちろん、行動統制無し条件でも、同じように相手の意思に反して出題していたと感じられる可能性があるが、自分の行動に対する責任の程度は統制有り群の方が大きかったかもしれない。しかし、この解釈を支持する結果は、原因帰属の測度では得られていなかった。

(注1) 3名の印象評定間には、事前も事後も統計的な有意差は認められなかった。しかし、課題遂行後の「頭の良さ」の評定には、一定の傾向が認められ($F(2, 19)=2.81$ $p<.09$)、7回を担当した者($M=5.14$)が、10回を担当した者($M=5.90$)および5回を担当した者($M=5.80$)よりも、評定値が低かった。各々の差は、フィッシャーのLSD法に基づく多重範囲検定で有意であった($ps<.05$)。しかし、この7回を担当した者は、行動統制、運命統制がともに無かった群で1回だけ協力し、他の3つの群では各々2回ずつ協力しており、実験結果に特定の影響が及んでいたとは考えられなかった。また、実験協力者の要因を組み入れた分析をした場合には各群の参加者数が非常に少なくなり、統計的分析は非常に困難であった。

(注2) 実験2では、実験協力者の一橋大学の学生がK大学の学生と信じられなかった徴候が2回認められた。しかしこの2回は、実験後の説明を聞いて疑念を表明した場合で、後知恵の可能性が高かった。結果はこれらの参加者も含めて分析した。

(注3) Goodwin, et. al., (2001)の実験1では、責任感をプライムした条件で注意量が一般に増大した。勢力者においても、ステレオタイプに一貫しない情報への注意が増大した。